

京阪神東雲

「むーせ」と私

山脈の会員には、在学中に文芸部から生徒会を通して発行された「むーせ」を記憶されている諸氏も多いと思います。現在47号まで続いている「むーせ」のある時代に関わりのあった方々に一文を寄せさせていただきました。

写真は、「むーせ」ルネッサンス號表紙

あの頃のこと

小寺雄浩(山脈6回)

’89(平成元年)朝日新聞鳥取支局が編集した「私の交友抄」(中巻)に載せた一文に、次のような個所があります。『(前略)敗戦の混乱からようやく立ち直る気配が見えた昭和27年4月、私はやっと県立鳥取東高等学校1年生の中にもぐり込んでいた。初めての国語の時間だったと思うが、当時ふとつておられたのが“カバさん”的愛称をたてまつっていた中村高士先生が「作文を出さないものはタンイをやらない」と話された。中学生気分でいたイガクリ坊主に、この「単位」という語は耳新しく響いた。母子家庭を細胞で支えている母を嘆かせるわけにもいかない。あわてて書いた一文が、どこでどう間違ったか、藤原登喜夫先生が顧問の文芸部誌

「むーせ」創刊号に載っていた。ものを書き続けるには若干の私怨が要るとしても、書くきっかけ、活字の持つ興奮と怖さを与えて下さったのは、この中村先生と藤原先生のおかげである。後年、自分が国語教師を目指すにいたったのもまた、深い授業で啓発を受け続けた藤原先生のおかげである。冰華と号して短歌をよくされていた藤原先生はその後、まさに氷の華のように短く美しい生涯を事故で終えられた。(以下、略)』

今、すっかり古ぼけた「むーせ」創刊号を取り出して

あらためて無常迅速を思っています。「ルネッサンス號」と付した表紙はあの昭和27年4月17日の、鳥取大火の焼け跡を描いた尾崎悌之助画伯のもの。それはまさにゼロからの、しかも明るい出発を暗示し、それこそ右肩上がりに一気に上昇してゆく我が国の成長期を自然に思わせるものでした。

ところで、この「むーせ」(“閑適”的意と、巻頭言で顧問の藤原登喜夫先生は述べておられる)の編集、発行には、私は参加していません。編集者には、奥付によると、一年先輩の井上義明さん(現、詩人)、山本幹彦さんたち九名も名がみえ、私の一文は、おそらく授業中に書いたものを編集のとき、取り込んでいただいたものと思っています。

以来、半世紀近く、今にいたってなお老境に入りつつある仲間と徒党を組んで冊誌を編み、雑文を書いてつれづれを慰める癖が身についてしまったのは、今は亡き中村、藤原両先生の仕掛けのゆえ、と思っています。それにしても

「ルネッサンス號」の文言、表紙絵の焼け跡に残るビル、そして、「渦巻き起る高潮」

「巡る世紀の歯車。」まさにこの国が“坂の上の雲”を目ざして一気にスタートしようとする気概と気分が、よく表されています。現今なら、とてもこんな気持ちになれるそうもないのが、若い今の人たちには気の毒な、申し分けないような気がしています。



文学に魅せられる

川崎裕美枝(山脈10回)

高校時代のすべての思い出がつまつたものが、私にとって「むーせ」です。表紙で一番印象に残っているのが、伊藤文代さんの作品だと思うのですが、青い海の上をカモメが飛んでいる図が印象に残っているように思います。小説、詩等文芸作品に親しみだしたのは中学時代の頃からでそれも学校の教材の補助として詩作品のプリントを2、3枚もらう程度だったのです。高校に入って自分達の雑誌「むーせ」があるということは私にとっては大変な驚きであり感激でした。人生について少し深く考えてみたいと気持ちもあって文芸部に入部しました。顧問は藤原先生で最初の作品は「運命について」書いて下さいといったものでした。何を書いたか覚えていませんが、いきなり「運命～」だったので記憶に残っています。2年目を迎えては広く読書会やりたいと思い、毎回お願いして塩澤先生、桔梗先生、三上先生に来ていただきました。作品も立原道造、萩原朔太郎、中原中也、大岡信、飯島耕一(荒地同人)等やりました。ニーチェ、カフカ、サルトル等多くの作品を読んだように思います。冬窓の外を雪が降っていて、その降って来る雪をチラチラながめながら作品を論じ合うのは私にとって感動の時でした。

「むーせ」の編集にあたっては、勧善懲惡なものを排し、なるべく現実の高校生活の本音のようなものを出していただくように思っています。

そのような感動の時が忘れられず、これからもずっと文学的なものと関わり合いながら生きていきたいと思うようになりました。NTTに入社して大阪に来てからも、そんなことを考えていきました。同人誌にも加わったりしたのですが、あの「むーせ」に携わった時のような感動と語らいはどこにもないことを知りました。

長い空白の時を経て、文学的視点が机上論だけのものではなく、即、人間の役に立つようなものではないか、等漠然と行動との接点を捜していたので組合活動に加わりました。社会の中で女、子供、弱い立場の人々の声はいつも打ち消されているように思い、やはり組織労働者の場からでも発信していくなければならぬと思ったからです。一人の女が、女性として、母親としてまた労働者として成立するには何と多くの問題が山積みしていたことでしょう。

行動の世界は常に体力勝負の世界でもあり、いろいろなものに対する自分の限界を知りました。限界の中で「むーせ」を思い出していました。合評会の

為にプリントを刷ったこと、火鉢にあたりながら雑談をして楽しかったこと、ハイキングを行ったこと、人生に期待と不安を抱いていたこと、雪をながめながら皆合評会で気炎を上げたこと等々。そしてそれらは私をその時間に立ち返らせ気がついたら意気消沈な気持を和らげ少しづつ前へ押し出してくれているようでした。

「むーせ」に携わったあの時期あの感動と情熱は一瞬の輝きだったのでしょうか。いいえ、私にとっては今なお胸の奥でキラキラ輝いている何ものかなのです。

二つの部活動から

伊藤文代(山脈11回)

せのびして、せのびして、やっとのぞいた小さな窓のむこうには、未知の世界がありました。文学というステージに、妖しくきらめく言葉たち。好奇心が吸いよせられていきました。東高に入学して出会った文芸部は、思い返すと、そのような感じです。

光をさしこんだ高い窓は塩澤先生でした。若い先生のありったけの思いをこめて、熱心に開かれた詩の会。本のお話。私は初めて詩を書いたり、「むーせ」に小説を投稿したり、青い元気でつっぱっていました。

入学早々、三つのクラブに入りました。文芸部、美術部、陸上部。どれもまじめだったので、まるでクラブ活動をするために学校に通っているようでした。陸上部は練習がきついので一年間でやめましたが。こんなバカがやれたのは、当時東高が自由で、それぞれの可能性を夢みさせてくれる雰囲気があったからでしょう。

私はできることなら美大に進学したいと思っていました。放課後のほとんどの時間を、汚れた美術部の部室で、絵を描いたり、おしゃべりをしてすごしました。ここでは、せのびもせず、つっぱらず、ありのままの自分でいられました。美術の桔梗先生は、文学にも深い方でした。私は二つのクラブ活動で、先生にも友人にも恵まれすぎたかもしれません。学科の勉強が大嫌いだったので、二つの部は、よい逃げ場でもあったのです。卒業後、学科で学んだ知識はきれいに忘れましたが、二つのクラブで得たことは消えません。絵を描くと元気が出ます。疲れたときは、詩の形で心を表現してみます。本を読むと眠れます。どれも一人で、気ままにやれることです。

卒業後、進歩発展なく40年が過ぎました。私は今も、東高の文芸部と美術部の二つの部屋をさまよっている幸せな「ゆうれい」かもしれません。



想いを言葉で表現する

竹下文枝(山脈16回)

“むーせ”なんと懐かしい響きをもって10代の青春へ誘ってくれることでどうか。今も書棚に1963年、64年、65年の3冊の“むーせ”が他の本と共に並んでいます。大切な宝物として、時にはページを開いて多くの作品を何度も読み返して来ました。

自称「文学少女」だった私は、高校へ入学と同時に迷うことなく文芸部へ入部しました。生きる意味をつかみたいと悩みはじめた頃、文芸部にはその答がありそうな気がしたものですから。

昼休みと放課後、ほとんど毎日部室へ足を運んでいました。そこでは、「生きること」とか「夢」とか「愛について」等々語り合ったり討論し合ったりしたものです。しかし、いつも固い話ばかりでなく、時には冗談やたわいもない話で笑い合ったりしました。同人雑誌“むーせ”的発行の準備や校正で雪の降る頃遅くまで残ったり、広告取りに放課後お店をまわったりしたことが懐かしく思い出されます。

一年生の時、黒板に縦に書かれた文字を見て「おい、むしせって何だ?」と男子が会話しているのが耳に入ったのですが「むしせではなくてむーせ“詩の女神”よ」と心でつぶやくものの、その当時気軽に男子と会話ができなかったのです。今ならいくらでも説明できるのに。そんな乙女時代でした。

休日には、他校の文芸部と何回か交流したり、史跡めぐりをやったりすることもあります。受験生だというのに「良く遊び良く学べ」と3年の秋、青谷の灯台へハイキングをし一日遊んだことも貴重な思い出です。高校時代は、“むーせ”と共にあったと言っても言い過ぎではないようです。

文芸部での友の語らいの中で、多くのものを学び、社会人として生きていく上での礎のようなものを身につけることができたようです。

年を重ねて来て、文章を書くということ、想いを言葉に表現するということが、こんなに日々生活を豊かにしてくれるのか。そして、つらいことや悲しいことがあっても、日記をつけたり、詩や短歌を作りすることが自分の心を支え癒してくれるということを知りました。また本を読み、本の中で多くの世界や人生を知り、心の財産を持つことのすばらしさも知りました。なによりも、「心が自由」であることの大切さや、日々の生活を前向きに、布を織り上げるように気持ちよく暮らしていくということがこんなに素敵かも知りました。すばらしい友との出会いそして大人になってからの再会。それも、文芸部や“むーせ”が存在していたからなのだと感謝しています。

今の世の中、私達が青春の頃にはもっと豊かに幸せになっていると思ったのに、何か一生懸命生き、働いても報われないことが多すぎるのではないか。世の中の動きもしっかり見つめ、生き方の初心を忘れないで暮らしていきたいと思っています。

1年生の時、文芸部の顧問だった今は亡き橋本先生が、国語の時間に学生達に作らせた作品のいくつかを、その年の“むーせ”に載せて下さいました。その中に私の入学時の桜を詠んだ

◎桜花吹きくる風に舞い踊る

それに似たるわが心なり

17歳の想いをせめて70年間胸に抱き87歳迄は生きていきたいと昨年詠んだ短歌で結びます。

◎願わくは70年を胸に抱き

永久の国へと旅立ちたりき

寄稿 あのときの友達たち
北垣智浩(柏葉15回)

私は数学、物理は好きだったが、化学は本能的に好きでなかった。休暇で帰省中の兄と両親が文芸の話をしているとき興味をもって聞いていた。その後出征した兄が書架に積んで残した哲学、文学の書籍を好意を抱き読みだしたのは中学上級生の時であった。日本の近代文学を開拓した森鷗外、夏目漱石、芥川龍之介をはじめ阿部次郎の「三太郎の日記」などを漁り読みした。またルネッサンス時代フランドルに咲いたルーベンス、レンブラントに深い憧れを寄せた。両親の強い意志で旧制高校は理科へ進んだが、入学後三木正之、鵜崎博、小野一郎、石尾芳久などの極めて優れた文科在籍の友人を得た。彼等と読書会をつくり切磋琢磨した。哲学はカント、ヘーゲル、モンテニーなど文学はゲーテ、ミラー、ロマンローランなど古典主義からヤスパースの実存主義の文学論に及んでいた。ルネッサンス絵画は中世の暗黒を排し、ミケランジェロ、ラファエロ等を生んだフィレンツエ絵画が古典を完成させ、これに触発されたフランドルにルーベンス、レンブラント等を生み、後年になってフランスでドラクロアの手法が印象派の誕生に力となっていた。

文科の同期生には他に阪田寛夫(作家、芥川賞)三浦朱門(作家、文化庁長官)西田春彦(東北大名誉教授)などなどが活発な文化活動をしていた。昭和20年春卒業して皆が東京と京都に散らばったが大学へ入学前に兵役に服し還ることなく身を滅ぼした友も幾人かいた。石尾(関大名誉教授)小野(京大名誉教授)鵜崎(愛知産大教授)は夫々の分野で社会活動をしている。理科生の私は両親の意に反して建築を選んで今日までてきた。医学に進んでほしかった私に対し悔いを残したかも知れない。

返信葉書(平成10年度)の 近況報告から

○柏 10 の同窓生として今だに新進校の二中という観念が残っていましたが、京阪神在住会員が 2,300 人の多きに達している旨伺い“なるほど 60 年も経っているんだな”と今さらながら感無量です。(柏葉 10 回／森田四郎)○会社を退任して 4 年になりますがお蔭様で健康です。ゴルフ、囲碁のほか老人会のお世話などさせて頂いております。子供達は皆独立し、夫婦二人暮らしです。(柏葉 18 回／佐々尾昭)○精華女子高校を退職致しましてからはパソコンにて「平家の散華」と題して自己流の研究をやっています。また余暇に木彫りをはじめ堺市美術展に出品したりして頑張っております。(柏葉 18 回／磯江公房)○学生生活の延長のような“大学だけしか知らない”大人子供も 2 年前定年を迎えました。ケガをして、一人前の病院生活をして随分と日本の医療と医学について考えさせられました。自然の摂理の美しさと厳しさを知った“文化”を育てましょう。世代を超えて。(柏葉 22 回／加藤憲一)○柏葉 22 回の同窓会に参加した折に有志で東高を見学させてもらいました。昔の面影は残っていましたが、建物はほとんど建て替わり成長した我が子の姿を見る想いでした。(柏葉 22 回／紙野康美)○初めて案内頂きました。有難うございました。何十年振りに鳥取二中時代の正門の風景、講堂屋根のイラスト懐かしく拝見しました。(柏葉 22 回／加嶋久)○「行く川の流れは絶えずしてしかも元の水に非ず」連綿と続く母校、しかも元の人に非ず。諸兄のご健闘を祈る。(柏葉 23 回／岸本誠一)○ボランティア活動を含めると 42 年に及ぶユースホステル運動の第一線から、いよいよ退くことになりました。感無量です。(山脈 3 回／井上欣宏)○京都大学を定年退官しました。石油産業活性化センターの研究員としてサウジアラビアでの研究指導にあたっています。(山脈 4 回／乾智行)○山脈 5 回生の同窓会を明石大橋が完成したら関西で…の約束がまだ実現していませんが楽しみにしています。10 月に久しぶりに鳥取へ帰りゆっくり故郷を味わって来る予定です。(山脈 5 回／森本珠美)○非生産的な“不良高年”となり、あちこちうろついています。(山脈 5 回／森永豪)○山六会の 2000 年同期会を関西で開催することが決定し山六会関西支部を発足しました。成功を目指し幹事集会(要は飲み会)を重ねていますが総会へのつながりを考慮したいと思います。(山脈 6 回／久永浩)○今年 6 月末日を以って退職し現在年金暮らしです。超低金利、消費税率アップ等かなりこたえます。しかし、毎日が休日、旅行するなど趣味を拡げ、家内と二人でこれから第二の人生を楽しみたいと思っております。(山脈 6 回／藤原日出男)○山脈 7 回生のタイ特別同窓会に参加します。タイ在住の富本氏の好意によるもので 20 名弱が参加す

る予定です。そのために今回の総会には参加できませんが、来年を楽しみにしています。(山脈 7 回／元村昌公)○創刊号の“京阪神東雲”を楽しく懐かしく読ませていただきました。次号も期待しています。(山脈 8 回／太田獎)○肉体的にも一つの境界線なのか 60 歳に近づき、衰えの如きを感じますが、精神において残される日々を楽しく目的を与えられて燃え尽くしたいものと思います。(山脈 8 回／北村千尋)○退職の年には少し早かったのですが仕事から離れる事を決心し現在は今までできなかった楽しみをみつけて色々挑戦して頑張っています。(山脈 12 回／池田峯代)○いつもご連絡いただき有難う御座います。故郷での生活よりも優に京都人としての生活が長くなりました。三人の子供達は未だ未婚ですが各地で社会人として活躍致して居ります。主人の母、近々 91 歳になります。介護に当たり毎日忙しく淋しいと思う暇なく候。(山脈 12 回／山本由利子)○結婚して 11 年余り長女も 10 才となり 3 人の母として毎日主婦業に頑張っています。東雲会の会報をいただき東高時代を懐かしく思い出します。(山脈 31 回／仲島三紀)



校歌を歌う柏葉OBの皆さん (平成10年11月)

平成10年度総会の挨拶

京阪神東雲会長 野田幸生(山脈4回)

1 開会の挨拶

本日は皆様何かとご多用の中、大勢ご出席いただき誠にありがとうございます。本席の出席者は 175 名であり、今回も盛大な会を開催できますことを心からうれしく思うものであります。

ご来賓として、鳥取の本部同窓会より八村会長・倉恒副会長、母校より森本先生においでいただいております。また当地に在住の恩師森山先生(東高の校歌を作曲された先生)、高先生もご出席であります。お忙しいところ有難うございます。

今回の総会は、山脈 15 回の皆さんに当番幹事をお願いいたしました。10 回以上会合を開き、チームワークよろしく準備していただきました。本当にごくろうさまでした。

またこの 15 回の幹事を応援するために、鳥取から 15 名の同期の方々がかけつけて下さいました。心か

ら歓迎するものであります。15回の皆さんには、これを機会に一層団結を強め、すばらしい同期の集団になられることを信じて疑いません。

当会の会員では卒業満70年の柏葉1回の片桐先輩を最長老に、最年少は山脈42回の虎谷さんで、年長と年少の方の卒業年度の60数年の開きを越えて同じ同窓として一堂に会するのは当会の誇るべき特徴であります。

2 総会案内の送付方法等変更の説明

今回より総会の案内状の送付の方法等変更しておりますので、その概要をご報告しご了解頂きたいと存じます。

以下平成9年度の会計に基づき説明します。

当京阪神東雲会の会員は約2,300人であります。毎年この2,300人の方に総会の案内を差し上げております。名簿の手入れ、案内状の作成、発送等を業者に委託しております。

この業者への委託料と往復はがき代(一人当たり100円)約31万円(同135円)が総会の案内に要する通信費であります(名簿代5万円は、実費で分譲するため除いております)。

さらに、幹事会の会議費、諸連絡に要する通信費や本部の総会に出席する交通費等を合計しますと、当会の運営費として54万円(一人あたり235円)かかっております。

一方収入は総会のご出席者の会費収入が殆どであります。出席された方の会費で活動しているわけですが、会費収入に占める運営費用が35%に達しています。つまり、1万円の会費のうち、3500円が運営費であり、率直に申しあげて出席者の負担が過大で、会費が高い感じは否めないところであります。そこで、

第一に、出席されない方からも一口1,000円の会費を負担、カンパをお願いすることにしました。その結果、380名の方から約50万円のご協力を頂きました。

都合で出席されない方の関心の高さを表していると存じ、感謝の気持で一杯であります。詳細については、来年の総会でご報告します。

第二に、会費を頂戴するわけですから皆様にご連絡する会報を発行することにしました。案内状に同封した8ページの冊子があります。この会報の編集は山脈12回の岡田さんにお願いいたしました。立派な会報ができました。厚く御礼申し上げます。

第三に、毎年2,300人の方に案内いたしまして、150名が出席、1,000人の方から欠席のご返事が参りますが、残りの約1,000人の方からは返事もありません。

そこで今後、昨年と今年続けて返事のなかった方には案内状を送付しないことに致します。ただ、全員にご案内すべきだという意見もありますので、本部の名簿が発行される6年に1回は全会員に案内してはどうかと考えております。

以上の結果、冊子の印刷代金、送料等支払の増加もありますが、会費やカンパの収入や案内状の送付対象の削減による通信費の減少により、収支に余裕が生じます。

来年度以降練越金を増やすと同時に出席者の会費を少しでも減らす方向で検討して参りたいと存じます。今後の当会の運営につき説明しました、ご了承お願いいたします。

3 終わりに

世の中は深刻な不況であり、なかなか明るい話題もありません。JRの大坂駅前に21世紀まで772日という表示が出ております。将来への希望・展望をもって21世紀を迎えるものであります。

皆様のご健康とご多幸をお祈りし、また本日の会が皆様のご協力により、すばらしい楽しい会であることを念じつつ開会のご挨拶とします。

会費およびカンパの郵便振替口座現在高は次の通りです。

平成11年7月28日 現在 511,000円

本年も京阪神支部の運営費として年次会費カンパとして一口1,000円をお願いしております。総会参加者からは、当日の懇親会費用の中に含めて会費をいただきます。欠席の方の、会費(カンパ)振込は郵便振込口座番号00900-0-85765、「加入者名 京阪神東雲会」へお願いします。払込人住所と共に卒業年次を山12というようにお書きください。

会計幹事 鈴木亮介(山脈11回)

校歌作曲の森山先生が 参加され盛大の内に終わる 平成10年度総会の報告

平成10年度の京阪神東雲会総会は11月21日に盛会のうちに終わりました。会場では「会報を見たので」ということで、文章を寄せていただいたり、また創設時の写真も送られてきました。

会長の挨拶にあるように、本部から、多くの役員や母校の先生方にも参加頂きました。中でも、東高校の校歌の作曲者である森山(旧姓田中)



妙子先生が、初めて参加され、最後は先生と共に「渦巻き起る~」の大合唱でした。(写真)先生によれば、「現在、甲子園に住んでいます。私は90歳までは生きますので、なんとかそれまでに甲子園で東高校の校歌を歌いたい!」とのお話でした。同席の森本先生は今年母校に帰られ、二度目の野球部の部長とのこと、プレッシャーがかかった様子。今世紀はもう無理にしても、なんとか東高校になってからの初出場と初勝利を期待したいもの。当番幹事の山脈15回の鳥取の応援組も15名加わり、久々に純粋の鳥取弁に矯正された楽しい懇親会でした。

ユニークな活躍するOB紹介 グリーンネットワーク『遊花塾』開校

紹介する西根氏は、東高14回生。昭和42年県庁へ就職。平成3年退職後、社団法人葦の会に勤務。平成5年同会副会長を辞する。平成5年から3年間中国の河北、山東省の園芸指導。本年2月に、「地球の環境問題から鉢植えの育て方まで何でも教えます」というユニークな『遊花塾』を鹿野町に開校。

西根雄司さんの仕事を 側面から眺め、感じること 中井康友(山脈8回)

今年、3月末定年退職をむかえ、西根さんの仕事をパートタイマーとして手伝わせていただいています。

西根さんは、20余年勤務された農業改良普及員・農業線専門技術員としての仕事を退職され、希望されて現在の仕事(花の苗づくり)をされて3年になります。

4棟のハウス(1,840m²)。主な出荷先、大阪・姫路市場の中には種々の花の苗が、種まきより始まり、数十万鉢(50種類)育っています。

ご夫婦で始められ、現在は私達パートの者が数名手伝いをさせてもらっています。その中には知的障害を持っておられる方も3名おられます。西根さんの農業に対しての基本的な理念の一つである「遊び心を取り入れた楽しい農業」の理念どおりに、毎日楽しく、真っ黒になって仕事をさせていただいています。

私事ですが、教職時代には見えなかった事柄に触れさせてもらう度に、「ドキッ」としている毎日です。

西根さんの言葉の中に「植物は必ず、こう育ちたいと願っている。それを人間が勝手な考え方で曲

げてしまっている。私達は植物が、こう育ちたい」と願っているのを手助けすればよい。そうすればきっといい花が育ってくれる。」等々。そんな話を聞きながら冷や汗をかいています。

同窓の皆様も、西根さんを応援してください。西根さんは、「花博士」として、「名譽鹿野町民」として365日休みなく、花のために、人のために仕事をしておられます。

私も、「理想を失うときに初めて老いがくる」「若さとは、人生のある時期のことではなく、心の在り方のことだ」という言葉をしみじみと味わっている昨今です。感じるままに書いてみました。

写真はハウスの前の西根さん



★京阪神支部幹事会を7月24日に開催★

大阪市立西区民会館で7月24日(土)、拡大幹事会を開催しました。昨年の総会への報告を受けて、会報発行事業による会費の確保と郵送料の確保、当日参加者への負担軽減による総会会費の値下げなど見直しを図りました。幹事会の後、16期が残り総会の内容の検討をしました。今年は、アトラクションとして卒業以来?年ぶりの東高祭で踊った「キナンセイ節」を披露します。各テーブルではそれぞれの回で座って頂き楽しい時間を過ごしていただきます。皆様方のお越しをお待ちしています。(中井明秋・16期当番幹事)

写真は会議風景



古代東高 思い出シリーズ

第二回

倉 恒 貞 夫

(本部同窓会副会長・山脈3回)

昭和24年4月5日生徒初登校。

ところが『二中の校舎はどこだいなあ?』何しろ、一中、県女、市女などの生徒は二中に一度も行ったことのないものが多かったので。

現在の東高に行くには、駅前一国府線を駅の方から大橋の方に行き、大雲院の前から右手を見ると、真っ直ぐな大きな路ができていてつき当たりに東高の玄関が見える——と、大変わかりやすくなっています。(このようにするために、関係者のいろいろの苦心談もあるのですが)しかし、当時の右側「福田のうどん屋」の先、左に勢木屋(唐津物や、その他いろいろの雑貨店)のところの右側に小さい路があって、それを入って前田呉服店(いつもおじさんがきちんと正座してお客様を待っておられました)の前を通って天神川、三枚橋を渡って、土手を少し左へ、そこでやっと東高の玄関が見える(この周辺は何となく窪地があり、昔の道沿に植えたという小さい杉が少しあり、東高の入口は、高さ1mぐらいの半月形のセメントの校門が左右にあり、学校の区域の境には、小川というか、やや大きな溝があつて学校側の土もりの上には白萩が1m~2mの高さで茂っていました。これが咲いたときは、大変きれいなものでした。

校門に入った左側は、たしか泰山木やザクロや、いろいろな木が植えてあって、奉安殿がありました。敗戦後、特に進駐軍のやかましい時代ですから、何も言えない、むしろ、おぞましい感じだったのですが。

で、がやがや、がやがや生徒が集まり、点呼を

受けました。昭和20年の敗戦で、外地にいて引き上げて来た人、予科練を行った人など年齢の大きい人も混じっていたのです。それから、クラス分けで、各ホームルームを行ったわけですが、2年、3年は混合されたクラスでした。7ルームまでが1年生のみの、8ルームから15ルームまでが2・3年生の混合ルームでした。

東高の校舎配列を漢字の三に例えると、一番下が真中に玄関のある棟で、一階は校長室、事務室、職員室、2階は教室で右はしが生徒昇降口で各種掲示板などがあり薄暗い購買その先にトイレ(女子便所がありませんでした)、トイレに並んで、『控所』——ちょっとした小さい体育館みたいなもの。ボクシング部がリングをはって練習する程度の大きさ、卓球部もここをつかいましたが。

三の字の中の棒の一階左はしが、生物教室で。実験台のある部屋。(ここが、私の最初のホームルームでした)その隣が生物準備室、それから教室が2つ、二階は教室が4つ、私達2年のときはこの二階の右はしが2年B組(2B)で、私共の教室となり、左はしが、2A、中が2Cと2Dでした。昭和25年には、学年を解いたホームルームはなくなりました。三の字の一番上の位置に、1階右はしがから化学準備室、理科準備室、物理教室(これは階段教室になっていました)そして2階への階段があり、左側教室3つ、2階はこの上の部分だけ。三の字の左はしに、例のアンサーアル様式とかいう講堂があり、その上方の位置に、他校にはなかったプールがありました。

グランドの周りはソメイヨシノの桜が丁度最盛期をむかえて、幹太く枝も地をはうようなものであつてすばらしい花盛りでした。桜の樹の寿命は50年といいますから、二中は大正11年創立ということですから30年近く経つて樹としては一番よい時だったのではないでしょうか。

桜のむこうは麦畑、菜種畑で、鉄道まで何も建物はありません。授業中、煙を上げて走る列車が見えました。授業のない(自分で作ったブランク、又はさぼって)時は、田圃へ出たり、さらに線路を越えて高農の方へ遊びに出たりしたものでした。



さて、初めてのホームルームですが、私たちは『男女七歳にして席を同じうせず。』という教育を受け、幼稚園の時は一緒にでしたが、数え年で8歳、小学校に入学すると、男、女はまったく別々の組で、中学、女学校では、女子と話をするなどはもちろん、女生徒の方を見たなどといつて上級生に殴られるというような男女別々、まったく隔絶された世界で成長して来ました。

それが、とんでもない、一緒にホームルーム。名前が示すようにホームルーム活動やら勉強会やらをするということになりそうです。現在も連綿と続いている東高文芸部誌の、1959年鳥取東高十周年記念特集の中に
<女学生なるものをそれまで、まじまじと顔を合わせて語合うことなど、不徳?と考えていたので、今の若い人達ではおかしい程、固く緊張したものである。>(山2奥田澄朗)

<統合と相成って男女混成のクラスが編成されました。あの時あの胸のどよめき、未だに忘れ得ぬものがあります。第一に問題の焦点となるのは席の取り方でした。男女交互に並びなさい。男、女、男、女の順です。…前後左右どちらを向いても皆女性、全く面食らいましたね。今でも覚えています。私が初めて女子と話したのは統合になって丁度6日目、それも私が話しかけたのではありません。後ろから声がかかってきたのです。『消しゴム借してつかんせえな』なんと表現していいのかその時の感激。『ホ』わざと声を荒々しくわずか一言、でも消しゴム持つ手は感激にふるえてさえいたのです。…>(山3田中史郎)

<最初の失敗はクラスに分けられ担任がおいでになるまでの時間に、僕が発議したことでした。「最初に自己紹介しませんか? まづ僕は一中から来た××です。よろしく。」ところで、女生徒群は、急におびえた小動物よろしく一隅に固まって身をせばめ、まじまじと恐怖の瞳を集中させていました。>(山3倉恒貞夫)

といった様なことで、ホームルームが始まりまり意見発表、クラス討議、リクレーション、クラス対抗各種競技会、生徒会活動、自治活動…がなされて行ったのですが、朝のホームルームが終わると、各自自分の時間割に従って授業を受けました。授業科目と先生と教室が決まっていて。生徒がぞろぞろ自分の勉強教室へ移動しました。「ゲルマン民族」の大移動などと云ってました。

先生方はどなたもすばらしい学力、人格、教養を持ち、教育(特に自治、民主、独立)に情熱を持っておられました。英語は荒木一雄先生。今もその時のプリントが残っていますが、あの当時は物資が無い時代でしたから、薄い薄い透けるようなザラ紙に謄写印刷で、大学授業レベルの教材を

次々にもらいました。荒木先生が、御自分が生徒の時、授業のベルがなっても、その先生が授業を続けていたので、『タイムイズモーネえ』と言って叱られたという話をされたのをふと思い出しました。授業は毎時間、口頭泡の飛び散るような激しい強烈なものでした。校舎の三の字の一番奥の二階の左端の教室でした。

荒木先生に一年間教えていただいて、次の2年生になったとき、西高から東大卒の先生というのが来られました。この先生は我々を甘くみておられたのか勉強不足か、荒木先生に習っていた我々の質問に立ち往生で、リーダーの一行目が、一週間たっても終わらない。一年のとき、冠詞の勉強をしっかりしましたから、まず‘the’に対する質問から発して冠詞の特殊例などなど。次に‘be’動詞について…とうとう先生を辞められたとか。

もう一人の先生は、旧制中学の時に教えていただいた、口をひらけば辛辣な言葉が、ぽんぽん次々と出て来る先生で、『君達みたいなでけんもん教えとるより、家に帰って、寝とて本を読んどるほうが、よっぽどええわい…』といったような方でしたが、テキスト‘イーノックアーデン’をなかなか皆が購入しないので、テキストのないまま教室に出て座っているという状態で、怒った先生が、『お前やは、もう教えたらん。』と言って教室を出られると『ばんざい。』『さあエスケープ』。2年の時は、英語の勉強を全然しませんでした。ところが、3年になるとき、東西両高校の学力テストか何かあって、当然のことながら英語の学力ががた落ちで、そのために楽しみにしていた修学旅行中止(一部富士登山をした人がいたが)、「3年になる春休みは勉強せえ」ということになりました。私も、英語の文法の参考書一冊、ノートに丸写しして勉強したことを覚えています。3年になったら、若松清太郎先生に教えていただきました。(小樽商高の教授、鳥取商業の校長)おかげで、皆の学力が回復したのではないでしょうか。

まだまだ、各教科のこと、自治会、生徒会のこと、クラブ活動のこと、臨海学校、東高祭…書くべきことが一ぱいあります。

編集後記★創刊号の会員諸兄姉の支援にささえられ、第2号をお届けします。会報への投稿をお待ちしております。内容は、同期会の案内、母校の思い出、近況など提案も含め気楽にお書きください。原稿は、題字右の連絡先か、e-mailをお持ちの方は、sdi00397@nifty.ne.jpにメールを入れてください。毎年7月10日が締切です。★会報の題字は、当会顧問の上田先輩、挿し絵は山崎氏(山脈12回)によります。(係)